

# 間伐材 眼鏡 に変身



森の崩壊を食い止めた。この思いを託した眼鏡が誕生した。福井県越前市の木材業者が企画し同県鯖江市の職人が製品化した眼鏡は部品の一部に間伐材を使用。ベストセラー「バカの壁」の著者で解剖学者の眞老司さん(77)が理念に共鳴し、眼鏡を「眞老司モデル」と名付けた。間伐材から眼鏡が誕生するまでの舞台裏とは。(秦淳哉)



眼鏡フレームの弦の部分に間伐材のヒノキを使用した「眞老司モデル」。森林再生の願いから「森彩(もりいろ)」と名付けた製品は、木目の美しさと手で触れた時の木のぬくもりが特徴だ。実際に使用する眞老司さんは「冬場は特にいいですよ。温かくてね。金属と違って、もともと生き物だからソフトだし、かけていて気持ちいい」と太鼓判を押す。

森林が持つ機能は多彩だ。木々が土壌や岩盤にしっかりと根を張り、土砂崩れを防止する。土壌が雨水を吸収し蓄えることで、急激に河川に流入することなく洪水防止や水質浄化にも役立つ。この見解の違いは、間伐されずに残る森が、間伐されない森林はこれらの機能を発揮できずに荒廃が進む。

「森の破壊は進むばかり。間伐で森の整備を進めないと本当に崩壊する」と田中保さん(57)が抱いた不安がきっかけだった。日々、山に入り現場を歩く田中さんにとって森の現状は目を覆うばかり。木々が発する声は悲鳴にも聞こえた。

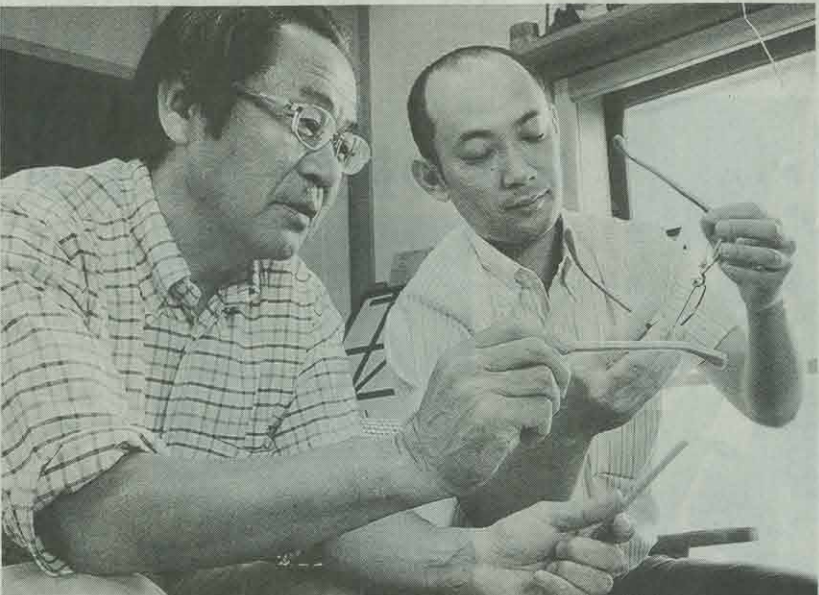
「木の密度が濃いままで放置すると、地表に太陽光が届かないから光合成ができず雑草も育たない。雑草がないと虫もまず虫を食べる鳥も小動物も来ない。木々の根が張らず土壌が弱くなる。雨で土砂崩れを起した森はさらに荒れてしまつて田中さんは嘆く。なぜ間伐が進まなかったのか。戦後、国は拡大造林の政策を推進、スギやヒノキの植林を進めてきた。しかしその後、価格の安い外国産木材の輸入が自由化され、国産

の木材需要が低迷。林業で生計を立てる林業農家も減少し、山が放棄されるようになった。林野庁によると、間伐が必要とされる樹齢十六〜四十五年の森林は人工林の約六割を占める。一方、二〇〇六年の木材需要約八千六百八十万立方メートルのうち、国産材は約千七百六十立方メートル、わずかに約二割にすぎない。

しかし、子どものころから虫捕りが好きで、今も山でソウムシの収集を続ける眞老司さんは、外国産木材の流入だけを森林荒廃の原因とする見方から懐疑的だ。「一九七〇年代の高度成長時代まで国産材は爆発的に売れた。林野庁は認めないだろうが、このころに国産材を切りすぎたのが原因で、資源の枯渇したところに外国産材がどっと入ったと解釈することでもできる。この見解の違いは、今後日本の山をどうするか、将来の姿勢が変わる重要な問題だと思う」

森林再生を目的に学者や森林組合役員らでつくった「日本に健全な森をつくり直す委員会」の委員も務める眞老司さんは、森林問題が採算の側面だけで語られる点も不満だ。「林野庁の役人が、将来の姿勢が変わる重要な問題だと思う。森林再生を目的に学者や森林組合役員らでつくった「日本に健全な森をつくり直す委員会」の委員も務める眞老司さんは、森林問題が採算の側面だけで語られる点も不満だ。「林野庁の役人が、将来の姿勢が変わる重要な問題だと思う。森林再生を目的に学者や森林組合役員らでつくった「日本に健全な森をつくり直す委員会」の委員も務める眞老司さんは、森林問題が採算の側面だけで語られる点も不満だ。」

「バカの壁」破る 試行錯誤を繰り返す半年来、職人が納得できる製品が出来上がった。自らも職人として製品化を手掛けた市川さんは「自分でこれは商品にはできない」と壁を作っては成功しないと言いつつ聞かせて努力した。眞老司さんが書いた「バカの壁」がなければ、完成しなかったかもしれない」と苦笑する。

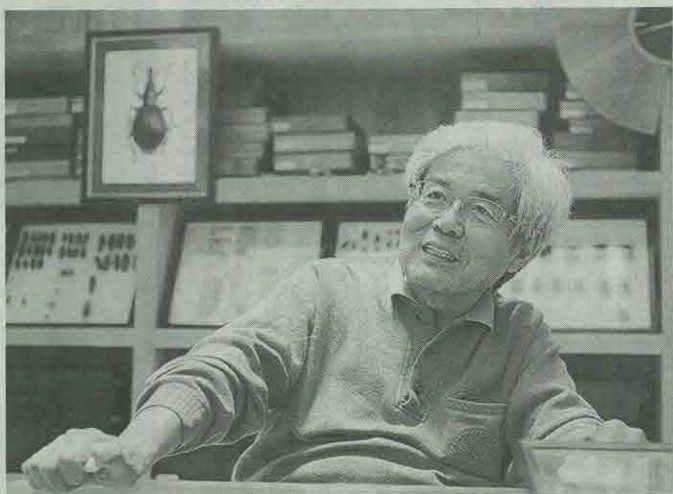


眼鏡の出来具合を確認する田中さんと市川さん—福井県越前市で

## 福井の「森の崩壊止め、再生を」職人

加工品に不向きとされてきた。しかし、田中さんは人体に影響がない特殊なポリエステル樹脂を間伐材に浸透させ、材質の均一化と強化を実現、コストも低く抑えた。問題は実際に製品加工してくれる業者がいるかどうか。目を付けたのは、概念にとられない商品作りを自社のアドバイザーとした「金子眼鏡」(鯖江市)だった。柿などの木材を利用した眼鏡は以前からあるが、高価で売れない。それが、田中さんの話で聞いた同社の営業課長市川純一郎さん(57)は「森林再生のため、自分たちが取り組めることがある」とすれば、眼鏡作りを通じて行つていこうか」と引き受けた。しかし、実際の製品化には苦労が続いた。型押しプレスで形成できる

## 「養老孟司モデル」共感も 理念その



間伐材を使った眼鏡への期待を語る養老孟司さん—神奈川県箱根町で

よつろつ・たけし 1937年、神奈川県鎌倉市生まれ。東京大医学部卒業、同大学院博士課程修了。81年同大医学部教授となり、95年に退官。現在は東大名誉教授。専門は解剖学。著書は社会時評から科学論、文学論まで多岐にわたる。「バカの壁」は2003年のベストセラー1位となった。

金属やプラスチックと違い、もともと木材を眼鏡フレームに加工作ることは難しい。まず、パソコンに登録したデータ通りに間伐材をフレーム状にくりぬく。一本一本、厚さの調整や角を取って丸みを出すヤスリ掛けは職人の手作業だ。使用時に顔にフィットさせるため微妙な曲がりをつけるのも職人の技が頼り。熱湯に約十分間入れて軟らかくしたフレームを素早く取り出した手で整える。曲げ加減はこれまで培った蓄積がものを言う。

出来上がった眼鏡を「眞老司モデル」として売出すことには、眞老司さんも無償で快諾。売上げの5%を森林保護活動に取り組み団体に寄付することも決めた。眞老司さんは自らの名前を冠した眼鏡への期待をこう語る。「例えば、お茶をたてる人が似合うのはこんな眼鏡でしょ。そんなふうに文化の中に溶け込むというか、自然に溶け込む存在になれば。眼鏡に限らず木材の使い方を含んで考えよう」